

今回は、事例報告だったわけですが、今後「環境教育」の学問的実践例として深めていくためには、環境教育の「理論」の勉強も必要になる、ということですね。

坂本さん>京大植物園の事例に当てはまりそうな具体的な理論（お話）について、なかサジェスションはあったのでしょうか？/石

===

<質疑応答（発表後）>

1 Q. (武蔵工業大学 女性)

参加者が増えた原因をどのように考えておられるか。たとえば、観察会のプログラム  
の改善によるものなのか、広報活動に力を入れたためなのか、など。

1 A. (坂本)

開始当初から、観察会のスタイルは特に変えていない。毎回宣伝を行って三年間継続  
することで、徐々に浸透してきたのではないかと考えられる。

2 Q. (鶴見大学 男性)

鶴見大学でも、大学の植物園で、学部と附属高校を横断した観察会に取り組んでいる。「京大植物園を考える会」は、理学研究科が行った樹木伐採を契機に設立された  
ということで、大学側との対立構造のようなものもあるのかもしれないと想像するが、大学側から活動を公認されることも重要なのではないか。その辺りをどのように  
考えておられるか。

2 A. (坂本)

理学研究科との対立は正直言ってあって、活動を公認されているというわけではない。

ただ、「考える会」には、三年間、毎月観察会を継続してきたという実績がある。そうした実績を積み重ねていき、「植物園のことなら「考える会」がよく知っている

る」というくらいになれば、ゆくゆくは大学側にも認めてもらえるのではないかと思う。

2 A' (同じ人からの返答) 我々の鶴見大学での活動でも、大学側にいかに関わってもらえるか、ということが最も大きな課題になっている。そこで、大学の教員にできるだけガイドを頼むようにすることで、大学との協同作業として行えるようにしている。そういったことも参考にしていただければと思う。

3 C (コメント 地球研畑田氏) 植物園での観察会は、NPOなどによってもたくさん行われている。京大植物園で観察会を行うオリジナリティーとは、そこが研究の場であるという点だと思う。研究をしている人が、自分の研究を発表して、その人が植物園で行っているのと同じ調査を参加者と一緒にやってみる、という形式の観察会もいいのではないだろうか。他の分野の大学院生なども、興味をもってくれると思う。

#### <総合討論でのやり取り>

「ナス科植物を使った環境教育」、  
「地産池消を支える・・・」、  
および本題の連続三題を併せての総合討論。  
(本発表に関するコメントのみ抜粋)

#### ・座長からのコメント

(北海道旭川市旭山動物園学芸員 奥山氏)  
京大植物園における、大学院生や職員が主体となった観察会の報告をいただいた。こういうことは継続が大事だと思うので、今後も是非続けていっていただきたい。

#### ・岩手大学農学研究科 比嘉屋氏 (一つ前の発表の共同研究者)

京大植物園の設立経緯が、2002年に理学研究科によって行われた園内の樹木伐採を契機にしているとのこと。それならば、今後「考える会」がすべきことは(観察会も

いいけれど)、大学側や近隣住民も含めて、植物園の管理のあり方を議論していく  
こと  
となのではないか。

「植物園での樹木の伐採」という場合、まず考えられるのが、危険木の伐採とい  
う  
ことだが、植物園では管理の一環として、伐採は避けて通れない問題ではないかと思  
う。

→地球研 畑田氏

2002年当時の植物園の状況を知っている立場から言わせてもらえば、あの時の  
伐採  
は、危険木だから伐ったといえるものではなかった。理学部植物学教室が、木が鬱  
そ  
うとしている状態の植物園を庭園のようにしてしまおうとして伐ったとしか思え  
ない  
状況だった。

→坂本 返答

実際、伐採した木の中には、中が痛んでいるものがあったのも確かだった。しか  
し、伐採の際に様々な人の意見が聞き入れられなかったのも事実。  
考える会は、「伐採イコール悪」という立場ではない。まさに、管理のあり方を  
色  
んな人を交えて考えていくことが目標です。

・千葉県立中央博物館 林氏

観察会の内容が、理系的な内容に偏らず、染料植物や園内にある遺跡など、多岐  
に  
わたっていた、というのが非常によいことだと思う。

千葉県立中央博物館には生態園という施設があり、そこで観察会を開催している  
の  
だが、いかに「理系」から外れるか、という点に気をつけていて、俳句の会なども  
行  
っている。

理系に偏らないということに、理系の人は常に注意しなければならないと思っ  
ている。

(発表後、生態園の資料をいただいた)

<質疑、討論以上>

<発表の場以外でのコメント>

・神奈川県 吉田氏

(発表前日に会話をした際、講演要旨を見てのコメントをいただいた)

講演要旨に、「参加者の感想からは、観察会が身近な自然に目を向けるきっかけになっていることが示唆された」と書かれているが、これをもっと数値的に示すことができれば、(なかなか難しいとは思いますが)なおよいだろう。

環境教育学会の発表自体が、環境教育の理論をやっている大学の研究者と、NPOや学校などでの実践報告とで二極化しているように思う。現場に入って理論を生かした研究例が少ない気がして物足りなさを感じている。

たとえば、参加者にどのようなことを身につけてほしいか、という目標を事前に設定し、その目標にそったプログラムを実践した際に、それがどのくらい達成されたかをアンケートなどで測る、といった取り組みができれば、学問としての環境教育としても興味深いし、京大植物園の存在価値もより明確なものにすることができるのではと思う。

At 17:34 06/09/18 +0900, you wrote:

京大植物園MLの皆様  
坂本です。

遅くなりましたが、環境教育学会の発表の際の質疑応答をまとめました。  
そこそこ分量があるので、テキストファイルごと送りますのでご参照下さい。  
結構多くの人から、有用かつすどいコメントをもらえたと思います。

21日の観察会「森で語ろう」では、従来のように植物園散策をしたうえで、

これまでの観察会の開催の経緯を説明、学会発表の簡単な報告をした後、参加者からの意見を引き出せればと思っています。

参加者から聞きたいのは主に以下です。

(以下の質問は坂本自身にも適用します)

- ・ 観察会になぜ来ているのか、求めるもの、今後どのような企画を望むか
- ・ 自分と植物園との出会い・かかわり、植物園の好きなところ、植物園について思うこと
- ・ 植物園の現状に対する認識、今後どのようになってほしいか
- ・ 「考える会」、観察会主催者に対する質問、意見

\*\*\*\*\*

坂本三和

京都大学大学院農学研究科 応用生物学専攻

里海生態保全学分野 修士2年

京都府舞鶴市長浜無番地 京都大学舞鶴水産実験所

0773-62-5512 (代表)

0773-62-9076 (学生室)

miwasaka@kais.kyoto-u.ac.jp

miwa.s@a01.mbox.media.kyoto-u.ac.jp

TEL:090-6127-4084

\*\*\*\*\*